
故郷

絢斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

故郷

【Nコード】

N4163F

【作者名】

絢斗

【あらすじ】

3本の腕を持つ少年・千寿^{せんじゅ}は、同じように“化け物”と蔑^ばまれ、太陽の下で暮らせなくなった人々と暮らしていた。そこには万里^{ばんり}という誰からも慕われる男がいたが……。

絶壁を利用して作られた、この隠れ家というべき住処は、まるで蟻の巣のような造りで仲間からは【蟻の巣】と呼ばれている。

崖の上から流れ落ちる滝を中心に広がる【蟻の巣】は階段や梯子で繋がり、個々の部屋だけでなく賭場や酒場もあった。

水は滝から各階層の水場に届けられ、絶壁に空けた穴からは空気とわずかながらも光が入り込む。

むき出しの岩肌は身体を冷やすが、冬が越せないほどではない。

しかし、正常な者はこんな場所では暮らさない。

世の中には村や町があり、田畑を耕す者、商いをする者、己の力を試す旅に出る者など様々いるが、皆太陽の下で生きている。

ここには太陽の下で暮らせない者ばかりが集まっていた。

己の意味ではなく、住む場所を奪われた者たち。

瞳が一つだけ。

掌から炎が出る。

触れれば心が読める。

人の傷を瞬時に治せる。

『化け物』と呼ばれ忌み嫌われた過去を持つ者たちが、肩を寄せ合い暮らしていた。

だが、実際に住む者たちはそんな過去に反するように明るい。

広間には常に人の気配があり、笑いがある。

割り当てられている個々の部屋には、誰がその主なのか分からないほどに人が行き来している。

「万里さん、お茶です」
ばんり

最下層に居を構える万里は、ここを統率している頭と言える人物だった。

短髪と紅の着物に映える精悍な顔立ちをした男前で、外見は二十五、六。若い外見に反して雰囲気は語りきれない過去を窺わせる重みがある。

だが皆と同じように騒ぎ笑う、気の置けない人物で、幼い頃からここにいる千寿せんじゅも、万里を尊敬し憧れるひとりだった。

「おう、ありがとよ」

滝を望む窓に右肘をつき外を眺めていた万里は、千寿の声に振り返り軽く左手を上げた。

千寿から茶を受け取り、再び外に目をやる。

静まる部屋に千寿はつい口を開く。

「月仁つきひとさん、最近赤城さんのところばかりですね。いいんですか？」

月仁とは先日、ふらふらとやってきた万里の古くからの知り合いという男だ。

年の頃は万里と同じくらい。見た目は害のない優男といった風で、男女問わず多くの好意を寄せられることだろうと思われた。

艶やかな黒髪を揺らす姿はあまりに綺麗で千寿でも思わず心を跳ねさせた。

だがそれが目の上のたんこぶと知ったのは月仁がやってきて間もなくだった。

「まったく、万里さんは忙しいってのに四六時中べったりして。俺だって……」

苦勞して勝ち取った“世話役”という任にかこつけて、一日中だ
ってそばにいたい。

それなのになんの建前もなく、万里の隣を陣取る月仁が、千寿は
たまらなく不愉快だった。

茶を載せてきた盆を抱え込み、ふてくされる千寿に万里は、くっ
くと肩を揺らす。

「まあ、そんなにカッカすんな。月仁は赤城との繋ぎだよ。俺と月
仁さえ繋がってれば上手くいく。例え万里派、赤城派と分かれてて
もな」

「知ってたんですか？　そういう動きがあるって……」

万里のような万人に好かれる人物は、時としてやっかみと嫉妬の
標的となる。

寄せ集めの人間が暮らす、この場所では過去の経験から卑屈にな
っている者も少なくなく、以前から万里を妬む声は密かにあった。

「知らねえわきゃねえだろ、こんだけ狭い場所だ。それに余分なこ
とまで教えてくれる奴だっている。近頃は俺に対する文句が酷くな
っているようだから月仁を呼んだんだ。あいつが赤城をなだめてく
れるか、できなくても向こうの動きを教えてもらえりゃ対処法は
いくらでも考えられるからな」

「そんなに……月仁さんは信頼できる人なんですか……？」

【蟻の巣】にいる人間の誰にでも平等に接する万里が“特別”を
作るとは意外で、そして傷ついた。

しかし千寿が考えるような関係ではないらしい。

「俺と月仁が道を違えるなんてことは絶対にねえんだ。光と影が離

れられないように……俺たちも離れられねえ」

話す内容とは裏腹に苦々しくつぶやいた万里に対して、千寿は少しの期待を覚える。

しかし、それと同時に、そこまで言う相手を好ましく思っていないことに寂しさを感じる。

矛盾だらけだが、いつそ誰にも割り込めないほどの仲だと言ってほしい。

「月仁さんのこと嫌いなんですか？」

千寿の問いに万里は眼を伏せ、しばし逡巡して顔を上げた。

「嫌とかそういうのはとっくの昔に越えてきた。俺には月仁しかいねえし、月仁には俺しかいねえ。選んでる余裕なんざなかった。それももう遠い昔の話だけだな。とにかく一番信用できる奴だ。俺と月仁はそういう付き合いなんだよ」

いとおしいものを見るように細められた瞳が、思い出す過去は二十数年の間では測れないものだと言っていた。

千寿はごくりと喉を鳴らした。

聞きたくとも聞けなかったことを知る機会かもしれない。

「万里さんが……万里さんが百年以上生きているって……本当ですか……」

震える声で問うた。

もしそれが本当だとしたら、まさに化け物だ。

いや、そうだからと言って万里を見る目が変わるわけではないが、自分が十になり二十になっていく中で万里だけが今のままだとした

ら……と、考えると背筋が寒くなる。

「誰に聞いた？」

唸るような声に肩を竦ませ、盆を更に強く抱え込んだ。

「す、すみません！」

やはり聞いてはいけないことだったと激しく後悔する。足が竦む。

「いや、怒ってんじゃねえよ。誰が言い出したか気になってな」

「……弦^{げん}です。あいつ、どこからそんな噂聞いてきたらしくて、皆に言いまわっていて……。弦はあーいうお調子もんだから皆が驚いたりするのが楽しかったんだと思うんです！ だから処罰とかしないでやってください！」

「だから怒ってねえよ。処罰ってなんだよ。俺は一度もそんなことしたこたあねえだろが」

少し呆れ気味にため息をついた万里は、まだ盆を抱えたままで身体を硬くする千寿に近づき、頭を撫でた。

大きな掌の暖かさを感じていると何故か涙が出そうになる。

万里は千寿の緊張が取れるまで、そうしていた。

千寿の肩が下がるのを見届けると、万里は視線を合わせて真面目な表情で言った。

「さっきの問いな、本当だ。厳密に言くと、今年で二百十四になる」

「……嘘」

千寿は愕然とつぶやいた。

「なんてな。嘘だよ」

「どっち……」

どちらが本当のことか分からなくて混乱する。
煙に巻こうとする万里に対して猜疑心が生まれる。

「分からねえだろ？ でも分からなくなったら困ることじゃねえ。こ
こは言わばバケモンの集まりだ。そんな中で例え俺が不老長寿のバケ
モンだって不思議はねえ。おまえのその背に生えた三本目の腕だっ
て、知らねえ奴からすりゃ十分気持ち悪いだろうしな」

穴を開けた着物から出る、常人にはない腕がひくりと動いた。

思うように動かせないくせに、感覚はあるために、切り落とそう
にも激痛に耐えられない。

まさに無用の長物であるそれを千寿は憎んで生きてきた。

「だけど俺はそんな風には思わねえ。おまえの三本ある腕だって
二本の奴と変わりないと思ってるし、弦の、闇さえ昼間のように見
える銀の右目だって可愛いもんだと思ってる」

千寿の憎むそれを気味悪がるでもなく、軽く叩く。

こんな風に触れられたことはない。

弦でさえ、未だ躊躇する。他の者など直視すらしない。

「要は相手がどう思うか、なんだよ。……ん？ なんだ、騒がしい
な」

風に乗ってかすかに“鶴木、いい加減にしろ！”という怒号と、

物の叩きつけられる音が聞こえてくる。

「あ……そう言えば鶴木姐さんが酒寄こせて酒場にいたから、また賭場壊したのかも……」

千寿と同じくらいの細腕でありながら、鶴木はここで一番の怪力だ。

懷に抱え込むようにすれば大木の一本や二本、軽く千切れる。

酒好きだが悪酔いしやすく、さらに賭けに弱くて気が短い。

酔ったあげくに賭場で暴れたことは一度や二度ではない。月に一度の割合でやってくる。

「まあた、あいつかあ。つたく、しょうがねえなあ」

額に手を当てた万里は、それでも苦笑しただけで少しも厄介とは思っていないようだった。

「俺がいかねえと駄目かな」

鶴木は万里に惚れているらしく、どんなに酔っていても万里の姿を見ればたちまちに大人しくなる。

猫にまたたび、鶴木に万里とはよく言ったものだ。

頭を搔きながら立ち上がった万里が、千寿の横をすり抜けていく。はっと我に帰った千寿は、万里の着物の端を掴んだ。

「んあ？」

「ごめんなさい！ さつき……」

万里を認めているならば、あえて聞く必要はなかった。それなのに聞いてしまった。好奇心で万里を傷付けた。

「いいんだよ。俺はこのみんなが好きだぜ。もちろんおまえもな」

振り返った笑みは、太陽のように千寿の心を照らした。

本当の陽の下では生きていけなくとも、万里の元ならば生きていける。

いつまでも、ここにいたいと切に願った。

「おい、千寿。急に呆けてどうした？ 大丈夫か？」

覗き込むようにした弦の顔が目の前に現れて、千寿は我に返った。

「……ああ、大丈夫だよ」

弦とふたりでやってきた絶壁は、あの【蟻の巣】によく似た場所だった。

半円を形作る湾を見て思い出してしまったのだ、五年前のあの日を。

万里が賭場に向かった直後に赤城の部屋から火が出て、すべてが煙に包まれた。

以前から計画していたものなのか、火事のどさくさに紛れて赤城派が万里派に襲い掛かった。

力づくで形勢を逆転させようとしたらしい。

だが結果は赤城を含む赤城派に死者が数名出ただけで、万里たちには何事もなかった。

万里があまり気にしなかったこともあり、騒ぎそのものはすぐに落ち着いた。

しかし、月仁が赤城をけしかけたのだの、赤城派を潰すために万里と月仁の共謀したのだのと根も葉もない噂が【蟻の巣】に流れた。

千寿も月仁に食って掛かった。

万里に赤城の動きを報告するのが役目ではなかったのか、と胸倉を掴み上げた。

『赤城は思っていたより用心深かった。そして策士だった』

それが月仁の答えで、目には怒りを溜め込んでいた。おそらく、それは自分自身へのものだったのだろう。

万里の役に立てないようならば出て行けと、そんなことを言う資格もないくせに、そう言い放って月仁を突き放した。

だが月仁は赤城の下へ行く以前と同じように、万里の元へと入り浸った。

千寿は世話役を放棄し、弦と二人で過ごすことが多くなった。

万里と月仁だけが変わらずにいたが、火種はくすぶり続け皆の絆はボロボロになった。

互いを疑う生活に嫌気が差し、唯一信じられる弦とともに安息の場であった場所から去った。

太陽の下で生きるために背中の中腕と、銀の片目は置いてきた。

弦が腕を切り落とし、千寿が眼を抉った。互いの痛みと罪を背負いたかった。

朦朧とする意識の中で走り続けた。

そして今暮らす村に辿り着いた。傷を手当てしてくれた村人たちは何も聞かなかった。

「帰ろう。村のみんなが待ってる」

山菜を入れた籠を軽く持ち上げ、弦は微笑んだ。

「うん、帰ろうか」

壁に叩きつけられる波が早く立ち去れと急かしている。

必要のない過去は忘れてしまえと万里に言われているようだった。

今、万里と月仁は何をしているのだろう。
あの時と同じ姿で笑っているのだろうか。
生きる場所が、あるのだろうか。

了

(後書き)

設定を考えず浮かんだものをそのまま書いてしまいました。
楽しんでいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4163f/>

故郷

2010年10月28日08時01分発行